2018 年 4-6 月

20180412
いただきもの
高橋沙奈美『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観――社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』北海道大学出版会、2018 年
どんな国についてであれ、その歴史・社会・政治などについて考える上で宗教というテーマが欠かせないのは一種の常識だが、いざそれをどのように論じたらよいかとなると、いくつもの難問が待ち構えている。ソ連のように「無神論国家」という建前のあった国を対象とする場合、単純な「抑圧／抵抗」図式を超えて実態に迫るのは言うは易くして行うに難い課題である。本書のはしがきや目次などをパラパラとめくると、「宗教／世俗」概念の問い直し、「後期社会主義」時代の特徴、ソ連全体と区別される「ソヴィエト・ロシア」という範囲におけるナショナリズム、文化資源としての宗教文化財の意義、観光資源とツーリズム、ソ連型「市民社会」の「祖型」ともいうべき「公衆」概念等々、困難だが興味深い主題が山のように並んでいる。このように山盛りのテーマをどのように扱っているのか、興味がもたれる。かなり厚い著作だが、何とかして時間を捻出して、遠くない時期に読むことにしよう。

20180502
与那覇潤という人について、私は以前から名前は聞き知っていたが、何となく食指が動かず、作品を読むことなしに過ごしてきた。その彼が最近、歴史学に別れを告げる宣言のような文章を書いたという話を複数の人から聞き、オヤどういうことだろうと思っていた。たまたま書店で彼の新刊書『知性は死なない――平成の鬱をこえて』（文藝春秋社、2018 年）をみつけ、興味を引かれて、買って読んでみると、歴史学に別れを告げるどころの騒ぎではなく、大学教師という職そのものに別れを告げた（告げざるを得なかった）のだということを知った。この本では、①著者個人の病気の話、②現代世界における知性および反知性主義をめぐる議論、③現代日本の大学の状況、といった主題が論じられている。著者が職を辞した直接のきっかけは①であり、それを②や③のせいにするつもりはないということを著者自身がはっきりと断わっているが、ともかく闘病生活の中で②や③といったテーマについて必死に考え抜こうとした格闘の記録といった趣を呈している。たくさんの論点を取りあげているため、個々の内容についてはあれこれの批判や疑問を出す余地があるが、とにかく重要な問題に一生懸命取り組もうとする真剣さは確かだと感じられ、これまで漠然といだいていた偏見を改めた。
本書に触発されて、ここ数年来あちこちで取り沙汰されている「反知性主義」ということについて、その原義と転義といった問題を含めて考えなくてはならないという気がしてきたが、これはなかなか手ごわい問題であり、時間をかけて考えなくてはならない。

20180505
昨日は、東京国際フォーラムのラフォルジュルネ・オ・ジャポンに行ってきた。私は長い

こと時間・金銭とも貧乏気質が身にしみこんでいて、コンサートに行くということは滅多にせず、音楽はもっぱら FM ラジオか CD で聴くだけだったが、定年退職後、たまにコンサートに出かけるようになった。ラフォルジュルネという催しのことは大分前から一応知っていながら特に行こうという気も起こさずにいたが、数年前に娘婿に誘われてマタイ受難曲を一緒に聴いて以来、雰囲気が気に入って、わりとよく来るようになった。たくさんのコンサートが提供されていて、一つ一つはわりと安価なのもよいところだし、お祭りのような雰囲気があって楽しい。
午前中は、ボリス・ベレゾフスキー、アレクサンドル・ギンジンほかで、バルトーク「2 台のピアノと打楽器のためのソナタ」とラフマニノフ「交響的舞曲」。バルトークは昔から好きな名曲だが、生で聴くと特に打楽器の迫力がすごい。ラフマニノフの方はこれまで聴いたことがなかったが、何カ所かで彼の別の作品からの引用があるみたいで、これも面白かった。
午後すぐは、ロイヤル・ノーザン・オーケストラで、モーツァルトを二曲（ドンジョヴァンニ序曲と交響曲「プラハ」）、その間にストラヴィンスキー「弦楽のための協奏曲」を挟むという変わった構成。モーツァルトは二つとも超有名な曲だし、やや渋いストラヴィンスキーも私がたまたま CD を持っていて何度も聴いていたので、聴き馴染みのある曲ばかりとなった。思いがけず最前列に近い席で、うるさすぎるのではないかと危惧したが、室内オーケストラだったおかげで、うるさいということはなく、個々の楽器の音がよく聞き分けられたのはよかった。
3 番目はバーバラ・ヘンドリクスのソプラノほかで、黒人霊歌をはじめとするアフロアメリカ音楽特集。彼女は私と同年齢で、さすがに声の衰えは隠せず、マイクを使って歌っていたが、歌いっぷりは堂に入ったもの。若いときに得意としていたオペラ・アリア類を封印して、ジャズやブルースなどのアフロアメリカ音楽を人権運動の一環として歌うようになったのは信条と心情によるところもあるのだろうが、彼女の声質や音楽性に合っているという面もあるのかもしれない。いずれにせよ、若い頃の得意分野から離れて新生面を切り開き、70 歳前後で堂々たるリサイタルを開くのは感嘆すべきことで、同年代の私も叱咤される思いがした。
一日のうちにピアノ、オーケストラ、声楽、それもかなりかけ離れたジャンルの音楽を聴き、GW のよい気分転換になった。

20180507
昨日はロシア史研究会例会（青山学院大学）に行ってきた。池田嘉郎『ロシア革命』（岩波新書）を題材とした和田春樹氏の書評と池田氏のリプライがそれぞれかなり長く述べられ、それから全体討論へと進んだ（正規の研究会後の懇親会を含めて）。大勢の人が活発に発言したので、私は部分的に口を挟むにとどめたが、議論に触発されて浮かんだ思いつきを一つ書き記しておきたい（以下では敬称略）。
和田は冒頭で、新書というスタイルでロシア革命を論じた本として池田著は菊地昌典の中公新書（1967 年）以来はじめてのものだと指摘し、また 1968 年の『ロシア革命の研究』（中央公論社）およびそれをうけた岩波講座『世界歴史』では、2 月から 10 月に至る過程は長尾久が担当したので和田はその時期を扱わなかったということを述べた。これは単

なる昔語りではなく、その時期以降の日本のロシア史研究では 1917 年論が（少数の例外を除き）ほぼ空白となってしまったため、池田著の直近の先行者は菊地昌典、長尾久（もっとさかのぼればトロツキーの『ロシア革命史』）となってしまうという事情を反映している。最近出た岩波書店の『ロシア革命とソ連の世紀』（全 5 巻）も、基本的には日本の研究状況を示すものであるにもかかわらず、1917 年の 2 月と 10 月はロシアの歴史家ニコラーエフとブルダコーフに委ねられているのは、いかにその空白が大きかったかを物語っている。この空白にはいろんな理由が考えられるが、一つには、1917 年についてはあまりにもたくさんのことが語られ、食傷気味だという感覚が作用していたように思われる。1917 年論を離れていえば、1917 年以前のロシア近代史にせよ、1917 年以後のソ連史にせよ（最近では、1991 年以降の旧ソ連諸国現代史も）、あれこれの凸凹はあるにしても、ここ数十年の間に多彩な研究が積み重ねられてきた。そして、それらをあわせたロシア近現代史総体としていえば、半世紀前とはずいぶん違う研究状況が生まれ、「ボリシェヴィキ史観」が支配的だったのは遠い過去と感じられるようになってきた。ところが、こと 1917 年論に関する限り、長い空白があったために、池田が新たに取り組む際に、改めて「ボリシェヴィキ史観の克服」を強調せざるをえないという事情があったのではないだろうか。そのこと自体をとやかくいうつもりはない。ただ、明快な文体で書かれた新書であるだけに、事情をよく知らない一般読者がこれだけを読むと、「日本のロシア史研究は全体としてごく最近までボリシェヴィキ史観の呪縛が強かったのだろう」というイメージをいだきかねない。これは池田個人の責任ではなく、われわれみなが考えていかなくてはならない問題だろう。

20180521

土・日にかけて、西洋史学会大会で広島に行ってきた。

私は広島には数十年前に某政治集会のために行ったことがあるきりで、市内の様子はほとんど全く知らない。今回、できればあちこち見物してみたいとも思ったが、それほど時間のゆとりもないし、足腰の不調のせいでそんなに歩き回れないという事情もあって、とりあえず平和記念公園（原爆ドーム、平和祈念館、平和記念資料館）を短時間見学してきた。原爆ドームを観光気分で記念撮影するのは不謹慎ではないかとというためらいもあったが、現地に着いてみると、大勢の観光客が写真を撮っているので、私もそれに倣った。ドームの写真は見慣れたものだが、考えてみると 70 年以上経っているわけで、そのまま雨風にさらされていたならもっとずっと崩れているだろうところ、「あの時点での崩れ方」をそのまま保存するためには相当の努力が傾注されているのだろうということに思い至った。

記念資料館の本館は現在、耐震補強工事のため閉館中で、東館のみが開放されていたが、それだけでも結構見甲斐があった。たまたま我が家の近所に被爆経験を持つ「語り部」のような人がいて、数年前に亡くなるまでよく顔を合わせていたのだが、彼女の少女時代の写真があり、私の知っている老婦人と面影が似ているので、「ああ、あの人だ」とはっきり確認することができた。

平和公園の見学に時間をとったため、学会の会場に着くのが遅くなったが、第 1 日目は公開講演の後半を聞いた後、かなり長い待機時間を経て懇親会に至るまで大勢の旧知の人と

会って四方山の話をすることができた。
2 日目の午前は現代史部会の 4 つのセッションに出た。もともと現代史部会と近代史部会の間を行ったり来たりすることを考えていたのだが、会場に着いてみると、現代史の行なわれる建物と近代史の建物が別々で、行き来が面倒そうだったので、ずっと現代史部会に出ることになった。やむを得ない事情があるのだろうけれども、こういう会場設営はあまりありがたくない。
それはともかく、私が聞いたのは、「ミンスクの藪の中――ホロコーストをめぐる史料批判の限界と可能性について」、「第 2 次大戦後アルザスにおける自治主義的運動の発展と特徴」、「西ドイツにおける学生の対米認識とその転換―― 1960 年代の社会主義ドイツ学生同盟（ＳＤＳ）に注目して」、「ドイツの緑の党の党内再編――左派フォーラムと出発派の動向を中心に」の 4 報告。どれもそれぞれに興味深い論点に触れるものだが、熟成度はまちまちであり、今後の発展が期待される。報告者はみな私にとって未知の人たちだったが、何人かの人とは会場で話をすることができた。
午後は小シンポジウム「社会主義圏をめぐる歴史研究の行方――ソ連・東欧史・ドイツ史の観点から」。池田嘉郎（ソ連）、伊豆田俊輔（東ドイツ）、辻河典子（ハンガリー）の 3 報告および富田武、星乃治彦の両コメント。テーマ設定の意義について疑問を呈する向きもあるかもしれないが、「過去」となったことによって「歴史研究」にふさわしくなった対象を多角的な角度から検討することは、（具体的な成否はともかくとして）十分な意義のある試みといってよいだろう。3 報告と 2 コメントあわせて 5 人の発言はそれぞれに言いたいことを言いっ放しの観もなくはなかったが、とにかく今後の研究へ向けての刺激になった。企画と組織に当たった河合信晴氏の労を多としたい。

20180524
西洋史学会大会のために広島に行った折りに、往復の新幹線で、沼野充義『チェーホフ――七分の絶望と三分の希望』（講談社、2016 年）を読んだ。
「はじめに」に次のように書かれている。
「チェーホフ以前のロシアにはドストエフスキー、トルストイといった大作家たちがいて、大長編を書くとともに、人生や世界についての壮大なヴィジョンを展開した。しかし、チェーホフはロシア文学の鬱蒼たる森でこういった巨大な樹木が倒れた後、朽ちた木を分解して養分に変え、次の世代が成長していくための土壌をつくったキノコみたいな存在だったのだ。もしも、巨木とキノコのどちらが偉いか、と聞かれたら、私としては、そりゃ巨木でしょう、と答えるしかないのだが、どちらが好きかと聞かれたら、やっぱりキノコかなあ、と答えたい」。
文学に関して純然たる素人である私に何かを言う資格はないが、素朴な感覚として深く共鳴するものがある。そして、本書はキノコの滋味をじっくりと味わわせてくれるだけでなく、その背景としての巨木、森、土壌についても丁寧な説明をしてくれている。若い頃にある程度読みふけって心惹かれながら、それっきりご無沙汰してしまったチェーホフを久しぶりに読み返してみたいという気分を誘われた。

20180613

先日訃報の伝えられた森田童子という歌手のことを私はあまりよく知らないのだが、何かのおりにふと聞くと、何か不思議な気分に誘われることがある。死亡記事によれば、代表曲「ぼくたちの失敗」は 1976 年に発表され、引退後の 1993 年にリバイバル・ヒットしたとのことだが、私の個人的な感覚（錯覚？）では、何となく 1970 年代初頭の頃の雰囲気を思い出させられる。訃報に接して久しぶりに聞いてみたら、とうの昔に治ったはずの傷痕をかきむしられるような感覚に襲われた。完全引退してから長いこと経ち、取材の類も一切断わっていたみたいなので、ある世代より下の人たちには全く知られない一方、一部に熱烈なファンがいるのだろう。世間から知られないまま生きていた人が亡くなったというニュースが突然現われて、ある時代の終わりのようなものを感じた。

20180617

昨日はソビエト史研究会年次研究大会に出てきた（専修大学サテライトキャンパス）。この研究会のことについては昨年の大会のときにも書いたが、今年も活発な討論の場となったのは目出度いことだ。

午前の第 1 セッションは若手研究者の報告。元来 2 つの報告が予定されていたが、やむを得ない事情で 1 つがキャンセルされ、松本祐生子「戦後スターリン期の祭典：モスクワ 800 周年記念祭における都市空間」のみとなった。「祭典」とか都市史といったテーマへの着目は最近の歴史学の一つの流れを反映しているのだろう。「大祖国戦争」における「惨勝」から冷戦の開始へという微妙な時期（1947 年）に祭典がどのように組織化され、どのような問題をはらんでいたかを論じようとするもの。修士論文に基づく報告とのことで、これから先、留学と現地調査を経てどのように発展していくかに期待が持たれる。昼食時に報告者と一緒になったので、もう少し詳しい話を聞くことができた。

午後の第 2 セッションは高橋沙奈美『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観』の合評会。評者として松井康浩、半谷史郎、井上まどかの三氏に著者の応答という組み合わせ。高橋著はたくさんの主題（後期社会主義論、愛国主義とナショナリズム、文化資源論、宗教社会学、「公衆」論等々）を盛り込んだ野心的なもので、それに応じて議論も多角的なものとなった。重要な理論枠組みとして使われているユルチャクの議論に関しても、松井氏はもっとユルチャクから離れた図式化を試みてもよいのではないかと問題提起したのに対し、半谷氏は本書におけるユルチャク解釈がどこまで当たっているかを問うというように、対照的なコメントがなされた。もう一人のコメンテーターたる井上氏は宗教学の専門家として、共産主義の擬似宗教的性格を言い立てることにどこまで意味があるかとか、西欧の「世俗化」自体が多様であることを念頭においた比較の視点、また「信者」であることの基準の歴史的変化など、重要な論点を提起した。フロアからも、私を含め多くの人が発言して、活発な討論となった。

最後の第３セッションは「隣接領域から見たソビエト経済史研究の現在」というパネル・ディスカッション。岩波書店の『ロシア革命とソ連の世紀』（全５巻）のうちの経済史関係諸論文の筆者たち 7 人による執筆意図説明と、田中延幸（ドイツ経済史・欧州統合史）、丸川知雄（中国経済史）、新田滋（マルクス経済学）という３つの角度からの問題提起。7 つの論文に対し 3 つの角度から、合計 21 ものコメントがなされる形になったため、議論がやや散漫になった観は否めないが、経済学者たちが歴史にどのように取り組んでいるの

かを知るよい機会となった。個人的には、田中氏のコメントのうちの「長い 20 世紀」論（ホブズボームの「短い 20 世紀」論に対置するもの）や丸川氏による中ソ比較が勉強になった。また、新田氏が基本的に宇野学派的なマルクス経済学の観点から発言したにもかかわらず、最後の最後で、社会主義圏の解体後、宇野理論をどう組み替えるかに展望が出ず、宇野派自体が解体したという趣旨の発言を行なったのが印象に残った。
懇親会を含めて、長時間熱心な討論が続き、ハードではあったが充実した一日だった。ロシア・ソ連史の中でも対象や観点に専門細分化が進行して、専門を超えた討論が難しくなりつつあり、ましてロシア・ソ連史の枠を超えたインターディシプリナリーな討論となると、そういう試み場自体が非常に乏しいという現状の中で、こうした討論の場が設定されたのは大いに有意義だった。事務局、とりわけ企画・組織化の中心になった地田徹朗、日臺健雄の両氏の努力に敬意を表する。

20180621
この頃、「世界観」という言葉をわりと頻繁に聞くようになったような気がする。それも、昔のように「ヴェルトアンシャウウング」という重々しい響きを伴った哲学用語としてではなく、もっとずっと軽く、ポップミュージックなどについて使われるようだ。「カリスマ」が安っぽくなったのはもう大分前のことだが、それに続いて「レジェンド」や「神」そして「世界観」も軽くなってきたのだろうか。それはそれで、一つの時代の象徴なのかもしれない。ただ、どういうニュアンスで使われているのかが、私にはまだよくつかめない。どなたか解説してもらえますか。

20180628
千葉テレビで放映されている「木下恵介アワー」については以前に書いたことがあるが（20180209 の書き込み）、先週から、「女と刀」という力作を放映している。この作品はもともと『思想の科学』に 1964-65 年に連載された中村きい子の小説（単行本化は 1966 年）をもとにしてドラマ化された。鹿児島を舞台に、西南戦争の頃から始まって、明治・大正・昭和の数十年を描く作品である。明治維新からかなり経っても士族と農民の身分格差が厳然と残り、その上に強烈な女性蔑視が重なるという環境の中で、果敢に身分差別・性差別に挑んだ女性たちを鮮烈に描いている（主人公は様々な苦難の後、70 歳の年で「一振りの刀の重さほどにも値しない男よ」という言葉を吐いて夫を捨てるのだという）。岩崎加根子、馬渕晴子、中原ひとみらが力演している。
鶴見俊輔は中村きい子の原作を、「この本には、明治以後の百年を、この本一冊によって見かえすほどの力がある」と激賞したという。千葉テレビがどういう意図でこの時期にこの作品を取りあげたのかは分からないが、ひょっとして NHK の大河ドラマに対抗しようという意図を秘かに込めたのだろうか。いずれにせよ、明治 150 年に当たる年にこういう作品を見ることができるというのは興味深い体験だ。